



浄土真宗本願寺派慶谷山桃原寺は口承によれば、1,000～1,200年ほど前に遡ると言われ、創建の地とされる医王山(富山県と石川県の県境)には「桃原寺」という地名が残っています。その後、その後早月川上流の虎谷、角川下流の慶野から現在地へ移ってきました。永正7年(1510)虎谷の地に仏閣があったところに真言宗から浄土真宗へ改宗しました。

本堂内陣の欄間には魚津市指定重要文化財に指定されている龍の彫刻があります。この龍が水を噴くと火事があるという言い伝えがあり、火災を予知し、水を噴くことで寺をお守りしてくれていると崇拝され、『水噴きの龍』と言われています。しかし、時々暴れ回って田畑を荒らして人々を驚かすので棕櫚縄で縛りつけて動けないようにし、左目に五寸釘が打たれています。昭和18年(1943)、昭和31年(1956)の魚津大火にも桃源寺が焼け残ったのは、この水噴きの龍のおかげといわれています。

水噴きの龍はお寺の本堂の中にあるので、扉の鍵が開いているときにだけ見られます。現在の建物は、部分的な増改築がなされているものの、江戸時代後期に東弘寺(高岡市)の伽藍(がらん)の一部を移築したと伝えられています。

桃原寺は、慶長年間に慶野から当地(魚津城の外堀付近)に移ってきました。飛騨の名匠の製作になるという山門をくぐって本堂へ入ると、正面の欄間に龍の彫刻があり、「左甚五郎の作」と伝えられています。

この龍は、しばしば欄間から抜け出し付近の泥田で水遊びをして人びとを驚かせたり、龍が水を噴くと必ず火事があるという言い伝えがあります。昭和十年(1935年)、龍が水を噴いたという噂が立ってから近所で火災があり、その後また水を噴いてあばれたので、棕櫚縄で縛りつけて動けないようにしたといわれています。昭和十八年(1943年)と三十一年(1956年)のそれぞれの大火にも桃原寺が焼け残ったのは、この水噴きの龍のお陰といわれています。



0001_桃原寺



0002_桃原寺



0003_桃原寺



0004_桃原寺



0005_桃原寺



0006_桃原寺



0007_桃原寺



0008_桃原寺



0009_桃原寺



0010_桃原寺



0011_桃原寺



0012_桃原寺



0013_桃原寺



0014_桃原寺



0015_桃原寺



0016_桃原寺



0017_桃原寺



0018_桃原寺



0019_桃原寺



0020_桃原寺



0021_桃原寺



0022_桃原寺



0023_桃原寺



0024_桃原寺



0025_桃原寺



0026_桃原寺



0027_桃原寺



0028_桃原寺



0029_桃原寺



0030_桃原寺



0031_桃原寺



0032_桃原寺



0033_桃原寺



0034_桃原寺



0035_桃原寺



0036_桃原寺



0037_桃原寺



0038_桃原寺



0039_桃原寺